

焼津市議会 市民福祉常任委員会 行政視察報告書

焼津市議会議長 村松 幸昌 様

視察者：焼津市議会 市民福祉常任委員会

委員長 杉田 源太郎

副委員長 村田 正春

委員 岡田 光正

村松 幸昌

原崎 洋一

(報告者) 鈴木 まゆみ

令和7年7月29日から30日に市民福祉常任委員会で千葉県浦安市、市川市を訪れ、行政視察調査をいたしましたので、その概要について報告します。

【視察地と項目】

1. 7月29日 千葉県浦安市「認知症支援について」
2. 7月30日 千葉県市川市「健康ポイント Aruco(アルコ)事業について」

1. 千葉県浦安市

「浦安市概要」

東京湾の奥部に位置し、東と南は東京湾に面し、西は旧江戸川を隔てて東京都江戸川区と対峙し、北は市川市と接している。漁業権放棄による海面埋め立て事業が行われた結果、総面積はかつての4.43km²の約4倍の18.79km²に拡大。昭和58年には東京ディズニーランドがオープン、その後も周辺地区に大型リゾートホテルなどが建設され、国際色豊かなまちに。人口は172,311人、世帯数は87,957。

「認知症支援について」

(1) 浦安市の現状

面積は焼津市の約26.7%、人口は約128%、平成31年から約2,000人増。東京ディズニーランドがあり千葉県内で一番若いまちと言われている。しかし65歳以上は32,487人、高齢化率は18.85%（焼津市は30%）。地域差はあるも高齢化が進み、認知症及び軽度認知障害（MCI）の人数は2040年には、17,000人になると推計している。

早い段階での支援体制・各種取り組みを強化していくとして「認知症とともに生きる基本条例」を制定することとなった。

(2) 各種取り組み内容について

■「認知症とともに生きる基本条例」の制定

急速な高齢化に伴い、認知症の方や支援をする方が増加している現状に対応するため、「認知症になったら終わり」という古いイメージを、「認知症になっても大丈夫、リスタートできる」という新しい認知症観に転換を図ることを最大のねらいとして制定されました。制定後の成果としては、認知症総合施策検討委員会に地域住民が加わり、当事者がオブザーバーとして出席するなど、地域全体の課題として施策検討が行われています。そして高齢者実態調査のアンケート結果から、認知症に対する否定的なイメージが少しずつ減少していることが示唆されました。

■認知症サポーター養成講座

認知症に対して正しく理解し、応援者（サポーター）を養成する講座です。公民館や団体・企業向けに実施しているほか、小学4年生の総合授業の中での実施も行っています。

■認知症家族交流会

家族や介護している仲間同士、悩みや体験、介護のノウハウなどを自由に語り合える場として実施、介護者の精神的負担軽減と、行政が家族の意見を把握する機会となっています。令和6年度の開催数は36回、参加者数は64人。

■本人ミーティング

認知症の当事者が自由に意見を話し合える集いとなっています。「人の役に立ちたい、支援される一方になりたくない」といった前向きな声も聞かれ、行政が本人の意見を直接把握する貴重な機会となっています。

■認知症理解促進のための普及活動

著名人を招いての講演会開催、若年性アルツハイマーの方を描いた映画「オレンジ・ランプ」の上映会実施（希望団体には無料で貸し出し）、認知症カフェ、認知症とともに生きるまちづくり応援店（認知症サポーター養成講座を受講した従業員がいる店舗に認定証を交付、現在55団体が登録）、認知症ガイドブックの発行など。

(3) 焼津市にとって参考となる事項・所感

■現在焼津市が策定している「（仮称）第1期焼津市オレンジプラン」のなかに、認知症の人やその家族、市民の声を聴く場として、本人ミーティングや家族会との意見交換会、介護事業者からの意見聴取などが組み込まれています。浦安市は早い段階からこのような取り組みを行っていました。工夫を凝らした取り組みや各種取り組みの実績は先進事例として参考になると考えます。

- 「浦安市認知症とともに生きる基本条例」制定。認知症を医療介護の問題としてだけでなく、地域全体の課題として捉えることを目的としており、本人ミーティングやワークショップを重ね、当事者や市民、関係機関の意見を反映して制定したとのこと。条例制定によって市民の意識に変化が見られ、共生を意識した暮らしが広がってきているとしています。これまでの認知症観からの転換を図る上では最も有効であると考えます。



2. 千葉県市川市

「市川市概要」

千葉県の西部に位置し、江戸川を隔てて東京都と相對しています。都心から20 kmの圏内にあり、文教・住宅都市として発展してきました。広域交通網の集中する位置にあり、7つの線路が通っています。

北部には梨栽培などの農業が盛んで屋敷林などの緑が多くあります。南部は京葉工業地帯の一翼を担っているとともに住宅都市が形成されています。

人口は492,895人、世帯数は256,211世帯、面積は57.44 km²。

「健康ポイント Aruco(アルコ)事業について」

(1) 市川市の現状

比較的若い世代が多く、学生や働く方が多い傾向です。高齢化率は21.5%（千葉県は全体で約27%）、2050年には30%近くになり、働く世代が一気に高齢化を迎えると考えられています。

心と体のバランスがとれた「健康寿命日本一のまち」を目指し、健康都市を宣言しています。

(2) 取り組み内容について

■参加方法

スマートフォンに2つのアプリをダウンロードする、または市から貸与される「活動量計」を使用。

■ポイント獲得

歩く：毎日の歩く歩数に応じてポイントを付与。

測る：市内20カ所の測定コーナーで体組成や血圧を測定すると10Arucoを付与。

■ポイント交換

貯めたポイントはデジタル地域通貨「ICHIKO（イチコ）」と交換可能。

1 Aruco=1 ICHIKO=1 円のレートで、500Aruco 単位で交換が可能（最大5,000 ICHIKO）。

■実績

- ・当初目標の5,000人を大きく上回る8,400人（アプリ登録者8,300人）が登録。
- ・令和6年度の結果では、40代女性を除く全ての年代の男女で、歩数が全国平均を上回る。
- ・事業アンケートの満足度は91.4%と高い評価を得ている。

(3) 今後の参考となる事項

スマートフォンアプリと高齢者向けの活動量計の併用により全世帯を対象として参加の促進につなげている。ポイントを地域通貨と交換できるインセンティブは、市民の継続的な参加意欲を引き出しています。

市川市の事例から、利用が増えるほど管理費用が増加することを考慮し、費用対効果の検証が必要であると言えます。

